

圓珠寺報

第七十二号

春のお彼岸法要 敬修

お彼岸はとても暖かく良い天候に恵まれました。これからは三寒四温、一雨ごとに暖かくなっていくことでしょう。また、桜などの花も楽しみな季節になってきます。

お寺の行事も団体参拝、花祭りや百部経など目白押しです。



常不輕菩薩品第二十 解説

二つ目の理由です。

一つ目の理由だけでは気付かない人がいる。仏に成れるぞと言っても、そんなものに成っても仕方がない。そう思っている人です。人々の迷いがあまりに深いと、ただ人を敬って尊敬して、自覚を促すという方法だけでは効果がないのです。そういう場合にはやむを得ずに、正面から攻撃を加えるのです。おまえの考え方は間違っている。目を覚ましなさい。せっかく仏様と同じ本性を持っていないながら、恥ずかしくはないのか。そう言っても、それ、また慈悲の表れです。この様な態度を取られたのが日蓮聖人です。ですから、いつも日蓮聖人は、不輕菩薩の心持ちであったと言われるのです。

不輕菩薩が手を合わせて人を拝んだ方法も、日蓮聖人が烈しく責め立てたことも彼らを覚醒

させる為に行った行為なのです。その精神は同じなのです。不輕菩薩はいろいろな善行をなして仏の境界に到達されました。日蓮聖人は、種々苦しい思いをしながら、命がけの布教をされました。どちらも同じなのです。必ず仏の境界に達するのですから、不輕菩薩を自分の目標としておられたのです。

その行動の違いは何故なのでしょう？時代が違うからです。不輕菩薩は、像法時代です。日蓮聖人の時代は末法の時代です。執権の北条氏に背くような教えを弘めるなら命に及ぶことも覚悟しなければ成りませんでした。

今は同じ末法ではありませんが、教えを弘めても人は命を取ろうとしません。けれどもそれとはちがった迫害もあるでしょう。邪魔をされたり、笑われたり。その様なことにも耐えて教えを弘めるといふ決意が必要なのです。つづく

仏陀の人生哲学 十五

四苦八苦 強敵に勝つ

お釈迦様の誕生日は、四月八日です。この四、八という数字は仏教ではよく使われています。四諦八正道は基本ですね。面白い

ところで四国八十八カ所もありま
す。苦しみのことを四苦八苦と言
います。生老病死の四苦と求めても得
られない苦。愛しい者とも別れなけ
ればならない苦。怒みを持つ者とも
会わなければならない苦。自己中心
であるがための苦。の四苦を合わせ
て八苦となります。

今回は、その一つ怒憎会苦につ
いて考えます。その憎しみについて仏
典にこうあります。「この世に於い
て怨みをもって怨みに報いれば、怨
みは決して止むことはない。怨みを
捨ててこそ怨みは止む。これは永遠
の真理である」

誰でも自分の身内が傷つけられた
ら復讐しようと思うのです。同じ苦
しみを味合わせてやると。これは復
讐の連鎖をうむだけで事態は解決しな
いのです。今のテロ事件も同じです。



そこで、仏典はこう言
います「戦場に於いて百万人
に勝つよりもただ一つの自
己に打ち勝つものこそ実
最上の勝者である」つまり、自己
に打ち勝つとは、怨みの感情を制御
することに繋がります。

そしてこうも教えます「地球がご
つごつして歩きにくかったら地球全
体にジュウタンを敷きますか、そう
はしません。どうしますか？靴を履
きます。では、全ての敵を打ち殺す
ために相手を全部殺すのか？いいえ
殺しません。どうしますか？全ての
敵を打ち倒す方法は、他者に対する
憎しみの心を制することです」

これが、仏教の怨みに対する態度
なのです。しかし、言うは易し、行
うは難しです。悲惨な事件が頻繁に
報道されているのを見聞きする度に
被害者からの加害者への怨みの声
が聞こえてきます。その気持ちは痛
いほど分かります。その無念さが伝
わってきますが、仏教とは、それ
も怨みを忘れようと説くしかないの
です。たとえ、机上の空論と言われ
ようとも。

入魂 開眼 脱魂 発遣

魂の宿っていないものに
魂を入れることを「入魂」
と言いますね。自分の魂を
ある事に注ぎ込むことも入
魂と言います。「一球入
魂」と野球でよく使われて
います。

さて、魂というものは
「出入りしやすいもの」と
捉え、これに関する言葉を
沢山駆使しているのも日本
語の特徴です。「鎮魂」
「魂を入れ替える」「招
魂」「魂祭り」「魂抜き」
など、自分の魂だけで無
く、他人の魂も自由に操
してしまいます。魂ぬき
は、お墓や、仏像だけでは
ありませんね。人形や写真
なども魂が入っていると
思われているようです。

入魂と同義語に「開
眼」があります。開眼と
は、新しい仏像などに仏
の魂の入れる儀式として
使われることが多いので
すが、本来の意味とは、

「迷妄を破って、真実を見
る眼を開くこと」なので
す。

また、迎えた以上はお送
りしないといけません。仏
様や菩薩さんを元のところ
へお送りする作法を「発遣
(はつけん)」といいま
す。これは一般的には、
「魂抜き」です。これをし
ないと仏壇など処分するこ
とが出来ません。

諸行無常は世の中の決ま
りです。形ある物は必ずそ
の形を失うときが来ます。
魂は宿っている物が使えな
くなったら本来の場所に
去って行かざるを得ませ
ん。仏様の魂だけで無く、
あらゆる物は仏性といつて
仏様の魂を宿していると見
ます。ですから、例え玩具
のようなもの
あっても役目を終
えたらご苦労様の
気持ちで手を合わ
せて供養したいも
のです。



御遺文 (日蓮様定てテキストより)

大切に包まれているものの

価値に気付く

袋きたなしとて金を捨つる事なか
れ、伊蘭をにくまば梅檀あるべから
ず。

祈禱抄

「袋が汚いからといって、袋の中
の黄金を捨ててはいけません。悪臭
を放つて、梅檀の木の香りを失わせ
る伊蘭の木を嫌えば、芳香を出す、
梅檀の木も失ってしまいます。」

日蓮聖人の門下となった者の中
は、日蓮聖人が幕府の要人によって
重んじられ、大きな寺院が建立され
る期待もあったことでしょう。とこ
ろが、日蓮聖人を待っていたのは、
龍口法難であり、佐渡流罪という仕
打ちでした。門下の大半は失望し日
蓮聖人のもとを去りました。

しかし、日蓮聖人は決して状況に
屈しません。この一説は、「袋(日
蓮聖人)が汚いからといって、その
中の黄金(日蓮聖人が指し示す法華
経の教え)まで捨ててはならない」
と弟子、信徒、広くは日本国一切の
衆生に呼びかけたものと解すること

ができます。

伊蘭はインドの伝説の木で死臭に
似たにおいを発すると言われていま
した。ただし、香りの良い梅檀の木
は、伊蘭の林の中に生じるとされ、
伊蘭を嫌ったら梅檀の木も手に入れ
られません。物事の上っ面だけを見
て評価してはならないと教えている
のです。

この御書は、聖人が流罪となった
佐渡島で書かれたものです。流罪に
なったとしても諸天善神は必ず護つ
て下さると説いておられます。この
御書には次のように書かれていま
す。「法華経の行者はたとえ不実で
あったとしても、智慧はおろかであ
っても、また不浄の身であったと
しても、さらに戒徳はそなえていな
いにしても、南無妙法蓮華経と唱え
たならば、必ず法華経の行者をもろ
もろの菩薩や人天・八部等(人間や
天上界の住人)、二聖(薬王菩薩・
勇施菩薩)・二天(持国天・毘沙門
天)・十羅刹女等(鬼子母神など)
守護し給うべきである。」私たちは
それを信じてお題目をお唱えしま
しょう。

三月二十二日は、町に
お住まいの方のお彼岸法要
です。

少しでも多くの人にお寺
にお参り頂けますように
色々な行事を考えています
ので、都合が付きましたら
どうぞお参り下さい。



第七十二回一日研修道場 (於：清普寺)

七十七名の参加を頂きました。当山からは、十七名がご参加。雨の多い春ですが、良い天気心の研修ですが、聞法に恵まれました。その分、農作業が気にならぬの修行はそれなりに辛たかも知れませんが、熱心に研修下さいませいものです。

た。外は暖かかったのですが、本堂内はチョット冷やつとする感じですが、講師さんのお話が中



植田上人の法話



大阪市・有本上人の法話

総参加者 七十七名

圓珠寺から十七名

前田 信子さん(三十一回)

橋本 裕子さん(二十回)

川上 愛子さん(二十回)

尼岸 勝さん(二十回)

加堂 孝子さん(十八回)

谷 絹代さん(十四回)

谷 護さん(十二回)

加堂 一義さん(十一回)

廣畑 美恵子さん(十一回)

加堂 よしのさん(十回)

早瀬 ハルエさん(十回)

奥 富美子さん(九回)

横瀬 幸子さん(七回)

門田 紀美子さん(六回)

川上 勝司さん(五回)

榎本 シゲ子さん(五回)

吉井 正人さん(三回)

ご参加有り難う

ございました

奈良 蓮長寺参拝

三月三十日、三十九名で日蓮聖人御遊学の霊跡・蓮長寺さんと東大寺・春日大社へお参りしました。

